

令和4年3月22日

プレゼンテーション資料

中西委員（旧被服支廠の保全を願う懇談会代表）



©(有)サンプロダクション

私はヒロシマの被爆者であり、（公財）広島平和文化センターの被爆体験証言者であります。



私は当時市内の中学生でしたが、被爆2年前から、勤労働員学徒として、学業を棄て



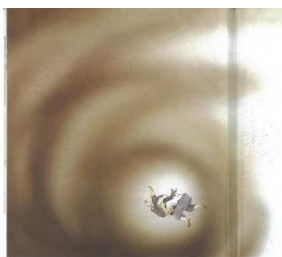
現在の陸軍被服支廠跡

今、検討されている被服支廠に就労、



兵士の軍服・軍靴などの材料・製品の運搬作業をさせられる毎日でした。被爆数か月前、呉の大空襲、沖縄の激戦など厳しい戦況の中で私たちは、きっと、少年兵として沖縄などの戦地に送られ、戦死しなくてはならないなどと思っていました。広島だけが空襲がないのも不気味でした。

8月6日の朝、市内の倉庫での作業に出かけるため、今も残る1号棟の前で、トラックが到着するのを待っていたとき、一瞬の閃光が空を覆い、



「やられた！」 熱い！

体が吸い上げられたような気がするのと同時に気を失いました。数分後、気が付いたら、数メートル先につつ伏せて倒れていました。きのこ雲と粉塵の中でしたが、「やられた！」「熱い！」などの声が聞こえ、周りが見えるようになると、顔に血が流れたり、火傷をした同級生が周りに倒れていました。



現在の陸軍被服支廠跡

私はこの巨大な建物のすぐ裏側にいたので、幸い無傷でした。（この地点の爆風は 3ton/m²、熱戦は 800° C）

この倉庫の3階に上がって市内中心部を見ましたが、



原爆の雲 (文) 山村隆平 (絵) 山本隆平

煙と焔に包まれ、一体何が起きたのか分かりません。広い廠内も多くの従業員・軍人が負傷し、木造の建物は全半壊し、大混乱となりました。

私は兵士と共に状況偵察のため、

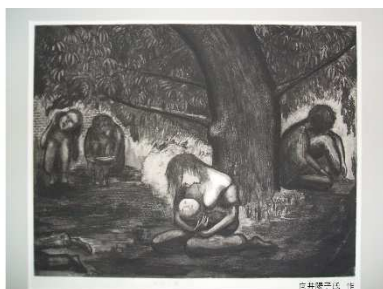


中津川町 原爆 松重美人氏 撮影

御幸橋西詰、有名な松重美人氏の記録写真の場所までやってきました。市内は黒煙と焔に包まれ、その中から火傷や負傷した人々が煙の外へ脱出し、そこに座り込んでいました。数百メートル先の広島文理大（当時）の本館のすべての窓から火が噴出しているのだけ見ました。これ以上、市内中心部へ入るこ

とはできず、被服支廠に引き返しました。火傷をした少年が「兵隊さん、助けて」と私に縋り付こうとしましたがどうすることもできなかったのが今でも忘れられません。

被服支廠の赤い巨大な建物は、遠くからでも見え、赤レンガの建物は軍の施設であることを市民は知っていたことから、被爆した多くの人達が力を振り絞って、被服廠通りを通り、被服支廠正門から中に避難してきました。



原爆被災者

亡くなっているように見える赤ん坊を抱きしめて座り込んだ母親の姿、全裸の体にトタン板を巻き付けて歩いてきた女性、顔がふくれた人や虚ろな目で受け答えも異常な人など、いずれも放射線によるリンパ線や神経系統のダメージであったことを知ったのはずっと後のことでした。

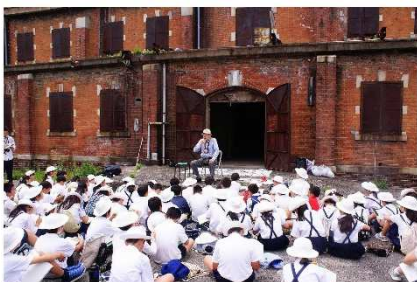


いたらと、今でも悔やまれます。一方、避難してきた人々はみな放射線で汚染された体だったため、私は、いわゆる救護被爆もしたことになるのです。



倉庫の中の人々は次々に亡くなりました。午後には、倉庫前の広場の一角で火葬というより焼却処分が行われ、異臭が流れていました。私は夕刻4キロメートル離れた郊外の自宅に徒歩で帰り着きましたが、市内に自宅のある級友の一人は、この倉庫で、その夜を過ごし、深夜に2号棟の中に収容、積み上げられたご遺体の悲惨さに身がすくんだと後に語ってくれました。この倉庫にまつわる悲劇は峠三吉氏の原爆詩にも記された通りです。申し訳ないことですが、何人の方が亡くなられたのか、記録は終戦の混乱の中で不明となったが、数百人の尊い犠牲者の魂がここに残っていることは間違いなく、それぞれの方がどんなに無念の想いだったか、何時も思います。

その後、戦争は終わり、厳しい戦後の生活の中で、原爆症を発症、同じような症状が悪化し、最後は吐血して死亡していく人が周りでも出たのは恐怖でありましたが、幸いに半年くらいで回復しました。復学・卒業して、会社員となったが被服支廠の悲劇を忘れることはありませんでした。しかし、会社のため、家族のため、懸命に仕事をするのみでヒロシマに関する行動をすることはなかったのです。1993年63歳でリタイアし、これからは社会へのボランティアを、できれば、被爆に関することができればと思っていたところ、1999年原爆資料館のガイドをするヒロシマピースボランティアが発足、第1回生として参加、活動を始めました。この中で、要請により、2000年から被爆体験証言者となり、今日まで継続、通算800回をかさねて証言を続けています。



証言のための車での原爆資料館の往来は、必ず、被服支廠の建物の前を通ることとなります。その度に、赤レンガの建物から声なき声の呼びかけが聞こえるような気がし、それは段々つつのってきました。一方で、県は再三この利活用について検討会を設置されいろいろな案が出され、私もその都度期待したが実現することはありませんでした。こうした中で年月とともに建物の周りは雑草が生い茂り、雑木まで成長し、一

見、廃墟のようになり、たまらない思いでした。

2012年関係者の座談会、2013年講演会を経て、2014年正式に懇談会を結成、保全を願う活動を発足しました。約280名の会員が参加しています。以降、毎年、数回の講演・慰霊祭・ウォーキングなどの行事を行い、まず、多くの方にこの被爆建物について知っていただくPRから理解賛同を進めていきました。



倉庫内外での証言活動も学校生徒他各種団体に行い、都度、感動させられることも多いのです。異空間の雰囲気のある倉庫内での証言は「独特の感銘があった」との先生からの報告もありました。また、小学生が被爆倉庫壁面をなでながら「熱かったのね、痛かったのね」とつぶやくのを聞き、感動したことも忘れられません。まさに、この建物は生きていと痛感させられたのです。

また、建築史のオーソリティが講演で、この建物の価値を高く評価してくださいました。(我々懇談会は)県に正門に表札を掲げることや雑草の除去を要請し、県はそれを実施されました。2019年、小トイレ・控室の

設置のための設計と共に全体の検討が行われましたが、耐震対応と費用などの観点から、県議会にて1棟外観保存・2棟撤去の方針が提起される事態となりました。私たちは反対の署名運動などをしながら、県に全棟保存を訴え、幸い各方面から同様に反対の声が上がりました。2020年には、証言集「赤レンガは語り継ぐ」を編集刊行しました。こうした動きを受けて、県は特別部署を設け、再調査・再検討をすすめ、今日に至っています。

以上のような経緯・体験を通じて、この建物の保存と利活用の基本的な考え方は、

- ・この建物は多くの尊い犠牲者の魂が残る慰霊碑であり、無言の被爆者、声なき証言者である。
- ・被爆の威力、当時の姿を可能な限り保ち、発信し、ヒロシマを風化させない。
- ・多数の方が来場され、戦争と平和、核兵器廃絶について学び、その想いを強くしていただくような内容・設備であること。特に若い方、外国の方にアピールするものでありたい。
- ・世界中の方々が交流する場であり、楽しみのある場でもあってほしい。

具体的な設備内容についての提案

・1号棟

建物の壁は可能な限り現状を保存。設備は最小限とし、被爆時の雰囲気を保つ。
展示は巨大な空間を生かしたものを随時展示。

(例)

(活用案) 倉庫の大空間を生かした大型壁画の設置



ピカソ「ゲルニカ」縦349cm×横777cm
画像提供 浜TINY生活



画像提供 特定非営利活動法人 明口の神話伝承継承機構



丸木位里・俊「原爆の図」



平山郁夫「広島生楽園」



・ 2号棟

一般見学者、外国からの訪問者、平和団体、芸術、伝統文化、演劇などの関係者が活動・交流・宿泊できる場とする。

(例)

平和団体の活動拠点

ステージ

宿泊(テント村)スペース

自販機コーナー

・ 3号棟

資料を展示し、市民ふれあいの場とする。

(例)

広島之三廠の歴史展示

被爆者に関連した資料の保存

瀬戸内海文化・観光の紹介

市民交流の広場（イベントコーナー）

災害時に必要な物資の貯蔵（災害時に避難拠点となる）